
IS -隊長補佐の憂鬱-

偽桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 一隊長補佐の憂鬱一

【Nコード】

N5945Y

【作者名】

偽桜

【あらすじ】

いろいろな重めの過去を持ったオリ主「御刻 礼衣」がIS世界に転生し、ドイツ軍で生きていくおはなし。

作者が初心者&文才がないので、それを含めて「OKだぜ!」という人以外はブラウザバックしたほうがいいかもしれません。

第一話 プロローグ（前書き）

初投稿です。

テストなので若干短いですが。

第一話 プロローグ

ガ……………ガ……………ガガ……………

それは心の削れる音？

ガ……………■……………ガ■……………■……………

それは心の最期の叫び。

ガ……………■……………ガ■……………■……………

誰かと自分の赤いナニカで染まった体は、もう少しも動かないけれど。

■……………■……………■……………ガ……………■……………■……………

ナミダも流せないほど、僕の心は磨り減ってしまっただけ。

■……………ガ……………■……………■……………■……………■……………

それでも、最期に、叫びたい。
それが絶対聞き届けられないとしても。

■■■■■■……イキタイ……■■■■■■■■■■

――――

さて、突然で申し訳ないと思うけれど、僕「御刻 礼衣（みとき
れい）」は転生者だ。

：オーケイ、その「いい精神病院紹介してあげようか？」みたいな
目線にはもうなれているから、怒るなんてことはしない。

でも、実際記憶として頭のなかにあるんだから、仕方無いだろう？

前世で普通の高校生として生き、死ぬ直前学校内で殺し……いや、
あの時の事はもう思い出したくない。

で、死後何か白髪の老人みたいなのが出てきて、テンプレの如くチ
ート能力を貰ってこの世界『IS＞インフィニット・ストラトス<
の世界』に来たって訳。

因みに貰った能力は、サブリ無しで『ヴィーグル』に乗れる能力と
全体的な身体能力強化。何か「役に立つ物なら何でもいい」とか言
ったらこうなった。

…というか『ヴィーグルエンド』とか、妙にチョイスが渋い。おかげで生活には苦勞しないし。

ま、そういう訳で、今は中学一年生の夏休みである。
せっかくの夏休みなので、僕は株取引で手にいれた某航空会社の株主優待券（配当でもらった）でドイツへ海外旅行をしている訳だ。
一人で。

…こっちの世界での両親には気味悪がられて中学に入学すると同時に独り暮らしさせられたからなあ…：まあいいけど。

さて、何で僕がこんな現実逃避みたいな自己紹介を誰かに語っているかと言うと。

「……………えーと」

「……………ふえ」

目の前で突然銀髪眼帯少女が泣き出したからである。
いや決して僕が泣かせた訳ではない。
簡単に流れを説明すると、

レストラン探しに路地裏に入る

←

目の前の少女が暴漢に襲われかけているのを目撃

←

ヴィーグルを使い暴漢排除

←

少女に話し掛ける

←

少女泣き出す ↑イマココ！

…訳解らん。

まあ、何か僕の言葉が何かのトリガーになったみたいだし、取り敢えず事情を聞こうとしてみる。

「あの、大丈夫？」

「……大丈夫では……ない………」

お、日本語通じた。

「……また……他の隊員に馬鹿にされる………」

『隊員』って事は、何かの組織にでも入っているのだろうか。見た感じ小柄だけど『ひみつきちごっこ』とかする年齢ではないっぽいし。

しばらく事情を聴いてみた所、何とこの少女、原作ヒロインのラウ

ラ・ボーデヴィツヒさんらしい。まあ見たときからそんな予感はしてたけど。

…実はIS自体は3巻ぐらいまでしか読んでないんだよな、僕。何か有無を言わせずこの世界に飛ばされたし。

まあ、大体の事情は理解できた。

ちょうど今は、ラウラさんが目の改造を行ってスランプに陥った時と織斑 千冬から鍛えなおされる間らしい。

この様子を見る限り酷いイジメを受けているみたいだな…
なんか今の状況も街での隠密行動の訓練中他の隊員に嵌められてこ
うなっただけだし。

さーて、どうしたもんかねえ…？

ま、どーせ助けるぐらいしか選択肢がないんだけど。

第一話 プロローグ（後書き）

初心者なので文も拙いですがよろしくお願いします。
更新はなるべく早めにする予定です。

：ヒロインとかチート能力とか全部AMIDAKUジで決めちゃったのは秘密。

第二話 僕が軍人になった流れとか（前書き）

急展開すぎた。

…すみませんorz

第二話 僕が軍人になった流れとか

あかい

あかい

まあるいいけの

まんなかで

ぼくはわらう

ぼくはわらう

そうしたら

めのまえの**が

あかいみずをふいたよ

――――

「それでは、御刻 礼衣さん。『シュヴァルツェ・ハーゼ』へようこそ。解らないことがあったら、気軽に私『クラリツサ・ハルフォーフ』に質問して下さいね」

…どうしてこうなった？

なんでいきなり歓迎の言葉を言われるのか流れが全く理解できない。

特に怪しいことはしてない筈なんだけどな…

|||||||

自分の身の上を言ったことで少し落ち着いたらしいラウラと僕は、その後表通りのカフェでケーキを食べていた。
いつも街に出るときは訓練で来ることがほとんどで、あまり外で食

べたことのないらしいラウラは周りをきよろきよろしながらバームクーヘンを頬張っている。

：周囲を警戒しているのは解るけど、ぶっちゃけ小動物みたいでかわい。

「で、ラウラさん」

「ムグ：何だ」

何か幸せそうな顔してる。けど、

「さっき言ってたことって簡単に話してよかったの？」

「あっ…」

やっぱり…

やっぱりこう言うのって、軍の方から拘束とかされるのかな……。早く終わるといいけど。

ま、その後当然僕はラウラさんの訓練の監視をしていたらしい人に取り押さえられ、ドイツ軍に身柄を拘束されてしまった訳で。

身体検査・尋問等々を3日間程やらされた。

ちよつと話をした監視の人に聞いてみると最初は「身元が特定できたらすぐ解放しますよー」とか言ってたのに、2日目辺りから「すいませんもう少し検査させて下さい、お願いですから!」みたいに態度が変わった。

：と言うか監視の人自体が軍服から軍服＋白衣の研究者っぽい人に替わってた気が。

で、それらが終わった直後、連れ出されていきなり軍服に着替えさせられた後いきなりさっきの様な事を言われた、と言う訳だ。

|||||

「質問してもいいですか」

「はいはい何でしょう、大体の事なら教えてあげますよ。あ、流石に私のスリーサイズとかはちょっと……」

なに言ってるんだこの人。

「いえ、そんなどーでもいい質問ではなくてですね……」

「どーでもいいとか言われた……」

「あー、しゃがんで地面にの字書いてる余裕あったら質問に答えてくださいませんか？こっちもツツコミ入れんの面倒なんです。というか本当になんで只の一般人である僕を部隊に？」

「身体能力・思考能力は遺伝子強化兵並み、しかも体内の分泌物を自由に操れる特殊体内ネットワークが構成されており、更に男性なのにIS適正Aなんてイレギュラーの何処が『一般人』なんですか。そんなこと言う口は塞ぎますよ？」

もうやだこの変態。

しかし、そこまで調べてたのか、ドイツ軍。

多分『体内の分泌物を自由に操れる特殊体内ネットワークが構成』
ってのは『ヴィーグル』の副作用だろう。身体能力うんぬんも多分
チート関連。しかし、

「IS適正A？」

そう、これは初耳なのだ。

女性にしか扱えないISは、男性には「IS適正…」（なし）」を
出すはずである。

そんな質問をする僕に、

「私達だって解らないんですよ！こっちの方が理由を聞きたいぐらいです！」

いやそんなキレられても困ります。

しかし、どうやら僕がISを動かせるのは（少なくとも検査上では）本当らしく、本当に動かせるなら僕をIS部隊に引き込み、駄目でも特殊部隊あたりに配属させる気らしい。というか、

「あ、御刻さんの日本国籍、消しときましたから★」

…逃げ場が無くなりました。

要はあれだろう、『ドイツ軍に入らないと国籍無くなるよ?』といいたいんだろう。さっきの言葉の★の所に書いてあった。

まあどっちにしろ、入るしか無いんだろうな……

「はいはい、入ればいいんでしょう入れば。ちなみに僕の役職は？」

「あ、役職ではないですがあなたと一緒にいたラウラ・ボーデウィッヒさんとタッグを組むことは決まりましたよ」

まあ、それは予想していた。

片や『落ちこぼれ』、もう片方は『いきなり飛び込んできたイレギュラー（しかも男性）』である。

タッグにして隔離するのは考え方としては順当だろう。

「と、いう訳で、改めまして『シュヴァルツェ・ハーゼ』ようこそ、御刻 礼衣さん」

|||||||

その日の午後。

僕は本当にISを動かせるかどうかを試すため、ISの倉庫に来ていた。

「…えーと」

……………そうか、ぼくはけっきょく

*****なんだ。

|| || || || || || || || || || side shift..ラウラ

「グ…え…アう…」

ISに触れ、装着された途端、いきなりミトキが苦しみ出したのを見て、それを見ていた人々は騒ぎ始めた。

しかし、騒ぐだけで誰も近寄る人はいない。

ミトキから発せられる雰囲気、あまりにも異常狂気じみていただったからだ。

眼の焦点は全くあっておらず、息も荒い。

そして、何よりも小声で発せられている言葉があまりにも狂っていた。

不意に、そんなミトキの姿が自分に重なった。

周りからは奇異の目で見られ、誰も近寄ることのない、その姿が。

そうか、この人も『ヒトリ』なんだな、と。

そう、思ってしまった。

なら、助けてあげなければ。

どうせ、周りの皆は助けようとはしない。私にそうした様に。

だから、これは偽善。

自分が彼を助けたら彼も自分のことを助けてくれるかもしれないという、そんな思考の結果。

そう自分に言い聞かせ、私は一歩を踏み出した。

break shift

壊れかけた自分の思考を引き戻したのは、小さな温かさだった。

その原因を探そうと目線を下にと送ると、僕のことを抱きしめてくれる小さなラウさんの姿。

抱きしめ方は、まるで壊れ物を扱うように。

不意に、自分がラウラさんを助けた時のことを思い出した。

4人ぐらいの暴漢に立ちむかおうとしていたその姿は、どこか諦めたような眼をしていた。

『どうせ助けは来ない』と。

結局、僕がラウラさんを助けたのは、ただの自己満足とか同情みたいなものだったのかもしれない。

でも、今度は僕がラウラさんに助けられた。

こんな狂ったような僕を。

………そのとき、僕は这个世界で初めて、心から温かいという感覚を実感できた。

第二話 僕が軍人になった流れとか（後書き）

感想・意見等お待ちしております。

第三話 入隊初日（前書き）

今更になって一話の前書きに誤字を見つけるといふ致命的なミス
r
z

相変わらず微妙な文章です。

第三話 入隊初日

「なあ」

「ん？」

「来週授業参観だよな」

「そうだね」

「面倒くせえよな、高校一年生にもなって何を親に見せるんだよ。
どうにかなんないかね」

「今回で最後になるよ」

「は？高校二年生でもやる筈だろ？」

「いいから、来週を楽しみに待てばいいと思うよ」

「????????まだ何も終わっていない時の一幕」

僕がISを暴走させかけた事件から、二週間程経った。

事件後一応行った動作テストではISを動かせたはいいものの、ドイツとしても僕としてもあのような事を毎回起こされたのではなかったものではないので、もう一度一週間かけて身体中を検査させられ、精神鑑定等々も受けた。

しかし、結果は『全く異常なし』。

原因が解らないのではどうしようもないので、結果あの時に僕を救ってくれたラウラさんが僕の監視役兼バディとして就くことが確定しただけになったらしい。ちなみに僕はラウラさんの補佐兼バディ。

そんなこんなで、実は今日がシュヴァルツェ・ハーゼでの初仕事だったりもする。ついでに今日から軍の宿舎へ正式に住むことになった。日本からの荷物の移動は全部やってくれたみたいで、とても有難い。今日は訓練だけらしいので、『初仕事』といってもそこまで感慨があるわけではない。検査終わってからずっと自主トレしてたし。

……一度、暇だったのでヴィーグル使って自衛トラップだらけの軍施設の屋上飛び回った時はかなり驚かれたな……あれやった後ラウラは『あれが入隊したての元民間人の動きだど？じゃあ私はなんだ！』とか軽く落ち込んでたし。研究者の人たちも『あのセキユ

リティ網を突破しただと？それが私たちの限界だと言うか！』とか頭を抱えてた。

あ、ちなみに『現時点で世界唯一の男性IS操縦者の監視役』という大役を任されたラウラは、周囲からも一目置かれる、というか手を出しにくい状態になり、イジメはなくなったらしい。「次は実力でも他の奴らを見返してやる」って気合を入れていた。その様子がかわいかったので、つい撫でてしまったら赤面して殴ってきた。まあ避けたけど。

そんな日の朝、ラウラさんと僕が朝食を食べていると。

「なあ」

「何、ラウラさん？」

「その『さん』付けは止めてくれないか？一応、今日から正式に私とお前はタッグを組むわけだからな」

「そうするのは別に構わないけど、ならその『お前』呼ばわりもやめてくれないかな、ラウラ」

「ふむ、別に良いだろう。ミトキ」

「あー、名字で呼ぶのはなるべくならやめてほしいんだけど……」

こっちの世界での両親の事を思い出すから。あの人達が最後に向けてきた目線は、紛れもなく『バケモノ』を見る目だった。そんなもの、誰も思い出したいとは思わないだろう。

「解った、レイ」

そんな僕の心境を察してくれたのか、ラウラは特に文句も言わず了承してくれた。

あの事件があってから、すごく、といえる訳でもないがラウラの僕に対する態度は他の人に対するそれよりも柔らかくなっていった。僕としても気軽に話しかけられるのはラウラだけなので、かなり有り難かったりもする。

「そういえばさ、ラウラ」

「なんだ？」

「今日の訓練内容って何なの？」

「簡単な基礎体力訓練だけだ、多分な。」

ついでに僕の紹介もする、とのこと。

隊員は全員女性らしい。まあIS部隊なら当然だが

……ラウラも居るし、心が折れるような事もないだろう、たぶん。

|||||

ついに来たよ、シュヴァルツェ・ハーゼでの自己紹介タイムが。
今やっと原作主人公の気持ちが解った気がしないでもない。

おかしいな、なんで女子が10人程目の前に居るだけなのにこんな
冷や汗が出るんだろう。

皆さん妙に目が怖いんですけど。『獲物を見る捕食者（性的な意味
d……ゲフンゲフン）』みたいな。

「えーと、今日からシュヴァルツェ・ハーゼに隊員が一人増えまし
た。彼は『世界唯一の男性IS操縦者』ですが、このことは機密事
項に指定されてます。表向きの役職は『ラウラ・ボーデウィツヒ隊

員の専属機体整備担当兼アドバイザー』となってますので、その辺りの詳しい事情等は後でファイルを渡すので良く読んでおいて下さい。……あ、ちなみに彼の詳細プロフィールが入っている当たりのファイルが一つだけ紛れ込んでm」

「何でそんな変なことするんですかクラリッサさん！？てかそのプロフィールに情報どこから持ってきたんですか！？後皆さん急に目つきを光らせないで！怖いからそれホントに怖いから！」

急に雰囲気を変え僕のプロフィールが書いていると思われる紙を取り出そうとするクラリッサさん（何と驚いたことにシュヴァルツェ・ハーゼの隊長らしい。性格に問題がありすぎる気がする）を全力で止める。

何かとっても先行きが不安なんだけど……

「冗談です」

本当か？それにしても目がマジだった気がするんだけど。

「では、御刻 礼衣さん。自己紹介をお願いします」

この雰囲気で自己紹介かい。余計やりにくくなったよ。

まあ仕方ないか。

「御刻 礼衣です。さっき『世界唯一の男性IS操縦者』とか凄そうな紹介をされましたが、偶然そんな特性が見つかっただけの一般人ですので、特にそこら辺は気にしないでいいですよ」

「一般人は普通軍施設の屋上を生身で飛び回れるのか……………」

……………うおいラウラ。僕を孤立させたいのかい？

ほら皆さん「はあ？」とか「そんな身体能力私たちでも持っていないわよ……………」とかドン引きしているし。

まあ、当然その後の訓練では僕の周りにラウラかクラリツサさん以外の人は居なかった訳で。

……………転校デビューならぬ軍隊デビュー、失敗した気がするなあ……………。

……………

そんな悲しい訓練終了後。

僕はクラリツサさんに呼び出しを受けていた。

「何の要件でしょうか」

一応敬語を使った方がいいらしいのでそうする。

「宿舎の部屋が決まったのと、明日研究所の方でまた検査があります」

え、まだ検査するの？もう調べられる所なんて無いと思うんだけど。

「専用機のための適性調査をするそうです。一日で終わるらしいのでそんなに緊張しなくても大丈夫ですよ」

ああ、そういうことか。

やっぱりデータ取りのためには専用機は不可欠だろうし、どうせなら軍の『切り札』にしたいんだろう。

「そういうことなのでちゃんと忘れないように来てください。後、これが部屋の番号と認証用の身分証です。部屋番号は覚えたらすぐに破棄して下さい。これで連絡事項は以上です」

要は自分で行け、と言うことなのだろう。

仕方なく宿舎の指定された部屋の前に行くと、そこには何故か先客が居た。

「あれ、ラウラ？」

「ああ、レイか……」

あれ、何か落ち込んでる。

「何でそんな調子悪そうなの？」

聞いてみると、

「とりあえずこれを見ろ……」
と、部屋の扉に貼られてた紙を見せてきた。

そこには、

『53号室 御刻 礼衣

ラウラ・ボーデウィツヒ

　　こんやは　おたのしみ　でしようね　b y クラリ
ツサ』

クラリツサさああああああああん!!!!!!!!!!!!!!

第三話 入隊初日（後書き）

クラリツサさん変態淑女化。

感想・意見等々待ってます。

第四話 朝にありそうなこと（ねーよ）（前書き）

戦闘シーンまであと少し。

やっとなヴィーグル使いまくれる。

あと8000アクセスと1500ユニーク突破しました。下手な文ですが読んで頂き、本当にありがとうございます。

第四話 朝にありそうなこと（ねーよ）

「本当に＊るのかい？」

「うん、そのつもりだけど」

「『＊られる前に＊る』なんて愚鈍で理想的な方法、君はやらないと予想していたんだけどな」

「それだけ追い詰められてるってことさ。失望した？」

「まさか。むしろ興味をそそられるよ。これだから人間は面白い」

「君も『一応』人間でしょ？何いってるんだか」

「何百回も『転生』してると、どうしようもなく暇になる物だよ。終いには僕みたいな『^{人外}観察者』になるのがオチさ。」

『そんなものなのかな』

『そんなものさ、^{イレギュラー}転生者なんて』

――僕と彼との下らない遊戯暇潰しの会話

――
――
――
――
――
――

|||||||side shift…ラウラ

部屋の前に貼ってあった張り紙についてはレイと二人で見なかった事にして、もう遅いのでとっとと寝よう、という話になったのだが。

「ラウラ」

「何だ」

「なんで裸なの？ 僕 of 精神衛生上せめて前は隠して欲しいんだけど」

「だが断る」

何でレイの精神衛生に悪いのが理解できん。

「あー、もうどうでもいいや。おやすみ」

む、流石に『どうでもいい扱い』されるのは心外だぞ。

反論しようにももうレイは寝てしまったようなので、仕方無く私も寝ることにする。

――――

布団の中で考えていたのだが、私はレイに対し少し思い違いをしていたのかもしれない。

というのも、ここ二週間で気がついたのだが、レイが私を見る視線は同類を見るような同情の目だけではなく、どこか『私にあってレイのは喪われてしまったナニカ』を羨み、私のそれを守ろうとする決意みたいなものが見え隠れしていた。

その『ナニカ』の正体だが、私の知る限りではレイの事を遠ざけた両親に関してぐらいいか思い浮かばない。しかし、私はそもそも両親がいないし、その事に関しては隠す必要もないのでレイには前に話してある。よって違う。

……………そういえば、私が試験管ベビーであると言ったとき、レイは蔑む事なんてせずに『ラウラさんはラウラさんなんだから特に気にしないよ』と言ってくれた。ちよつと嬉しかった気もす……げふんげふん。

まあ、その『ナニカ』の正体は全く解らないが、『レイの心の闇は私よりももっと深い』という事だけは感じ取れた。
その上で私に気を遣ってくれているのだから、レイには感謝しても
しきれない。

……私が、少しでもレイの心を癒せるのなら、してやらんとな。

|||||break shift

朝が来た。

『ヴィーグル』を使えば意識のオンオフは割と容易なため、起きた直後でも頭ははつきりしている。

「……あれ」

ふと隣のベッドを見ると、ラウラはもう居ない。

もう朝食を食べに行ってしまったのだろうか、と思い、自分も急いで準備しようと布団から起き上がると。

「なんでここにいるのさ!?!」

「ふぁ……?」

僕の布団の中にラウラが居ました。

しかも寝る前と同じ格好、つまり全裸で。

自分の顔が赤面していくのが解るので、『ヴィーグル』に乗って急いで心拍数を調整。

急いで『足』と『手』を『動かし』、急いでベッドの上から降りたところで『身体』を『捻り』ラウラの方向へ向ける。

これで一安心だと思ったら、

「あ、れいだゝ」

ラウラが素早い動きで抱きついてきた。

何とかして抜け出そうとするが、全く身動きがとれない。
どうすればいいのか迷っていると、

ガチャ。

「礼衣さん、そろそろ検査ですので急いだ方が………あ」

あ。

「おっと失礼しました。それではごゆっくり」

ボタン。

「クラリツサあああん！誤解ですつてえええええええええ！」

||
||
||
||
||
||

「すまなかった」

朝食を食べに食堂へ歩く最中、やつと頭が起きたらしいラウラは謝ってきた。

「いや寝ぼけただけだろうし別に気にしてないけどさ、なんで僕の布団に入ってたの？」

「それが解らんのだ」

「いや解らないってどういうことさ。まさか寝ぼけたとか言わないよね？」

「レイが私を自分のベッドに連れ込んだのでは無ければ、寝ぼけたぐらいしか可能性が無いのだが」

「マジですか」

まあいいけど。

「そういえば、レイも今日適正検査なんだろう？」

「うん、そうだけど・・・ってレイ『も』って事は、ラウラも検査するの？」

というかまだ専用機無かったのか。

「そのようだ、仮にもレイは私の専属機体整備担当と言うことになってからな。専用機がないと怪しまれる」

ああ、そういうことか。

その後も他愛のない雑談を二人でしながら朝食を取り、施設内のI
S専門研究所に一緒に行った。

……………なんかその様子を見た一部から「新入りの御刻 礼衣隊員とラウラ・ボーデウィツヒ隊員が恋仲である」なんて噂が流れ始めたらしい。余り悪い気はしないけど……………げふんげふん。

そんなこんなで検査会場。

僕もラウラも身体検査等々は終わっているので、何を検査するのかと話を聞いたところ。

「あ、戦闘傾向のデータ取るからとりあえず二人でテスト専用機使って戦ってみて★」

………はあ？

第四話 朝にありそうなこと（ねーよ）（後書き）

戦闘まで行けなかった・・・orz

ウィーグルの機能ってあんな感じで良かったんですけど？

感想等々お待ちします。

後、もしかしたら明日と23日は投稿できないかもしれません。
詳しくは活動報告にて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5945y/>

IS -隊長補佐の憂鬱-

2011年11月20日21時39分発行